

高校生の防災意識  
—引き渡し・帰宅困難—

千葉県立千葉高等学校長 高岡 正幸

1 学校の規模及び地域環境

校地総面積は 55,647 m<sup>2</sup> (東京ドームの約 1.2 倍)、海拔 20mほどの葛城の高台に位置する。現在地には明治 32 年に移転している。生徒数は 978 名、併設される千葉中学校は 239 名で中高併せて 1200 名を超える在籍数となっており、90 名を超える教職員を加えれば約 1300 名が日常的に活動していることになる。

生徒の通学範囲はかなり広範であり、遠方からの通学者も多く、出身中学は 200 校を超えている。

地域的には長洲、葛城の両町会の中心に位置し、高台にあることから、大規模災害時には地域住民の避難場所になることが予想される。また高齢者世帯が多く、万一の際には生徒による避難支援の可能性もある。

2 取組のポイント

(1) 地域とのネットワークを構築し、学校を核に地域と連携した防災教育の在り方を検討するため、生徒・職員並びに地域住民・保護者参加の防災講演会を実施する。

(2) 「防災」をテーマにした LHR を実施し、教職員に公開する。

3 取組の概要

実施時期	計 画 事 項	参加者
4 月	第 1 回担当者会議	本校担当者
6 月	AED 講習会	生徒及び職員
9 月	地域防災訓練参加	長洲町内会住民及び生徒・職員
10 月	防災講演会 第 2 回担当者会議 (地域懇談会)	地域住民・保護者・生徒・職員
11 月	防災公開 LHR	生徒・職員・他校教員
12 月	地域防災訓練参加	葛城町内会住民及び生徒・職員

4 防災担当者会議

	氏名	所属及び役職
1	木之本 省吾	近隣住民 (民生委員)
2	駒井 隆子	近隣住民 (葛城自治会長)
3	花輪 篤	中央区役所 地域振興課 くらし安心室 室長
4	長谷川 信	学校安全保健課 安全室

5	高岡 正幸	校長
6	大山 光晴	副校長
7	志鎌 敏彦	教頭
8	久保田 功	教頭
9	千葉 良夫	事務主幹
10	藤原 明夫	教諭（管理厚生部長）
11	野村 昌富	教諭（総務部長）
12	平野 司	教諭（1学年主任）

## 5 具体的な取組

平成24年度『命の大切さを考える防災教育公開事業』の指定を受けて、本校の教育目標『自主的精神』に則りながら、生徒の主体的取組を生かす形で進めてきた。

以下、順を追って本校の取組を報告する。

- (1) 6月に保健の授業で AED の講習を実施した。
- (2) 9月に近隣の長洲地区の防災訓練にサッカー部1年生が参加し、地域住民との連帯感が深まった。12月には葛城地区の防災訓練に千葉中生が参加した。
- (3) 2学期から、1学年クラス防災係会議を結成し、生徒の主体的取組が開始された。10回の防災係会議で11月の公開 LHR に向けての準備に取り組んだ。この『学校における防災教育取組事例集』の具体的な取組の作成も防災係の記録担当がクラス1ページ(写真も含めて)作成することになった。
- (4) 10月には、千葉市防災対策課大岡信先生をお招きして、『千葉市の防災対策～地域との連携～』の演題で防災教育講演会を実施した。対象は、1学年生徒・本校職員・PTA役員・近隣町内会役員及び住民・地域関係機関職員・開かれた学校づくり委員で、クラス防災係はアンケートを取り、11月の防災教育公開 LHR のテーマ決めに役

立てた。また講演後、地域住民・PTAによる地域懇談会を実施し、地域との連帯感が生まれ、絆が深まった。

- (5) 11月16日(金)6限目に防災公開 LHR を1年生8クラスにて展開。各クラスとも6班を編制し、クラステーマから班テーマを設定し、模造紙にまとめ班別発表をした。進行や総括も防災係が担当し、班ごとに特徴があり、楽しく活発にそしてアカデミックな LHR を創り上げた。

以下に各クラスの LHR の概要を示す。

### ① 1年A組

<はじめに>

千葉高校では防災公開 LHR を行った。おおよその内容は班に分けてそれぞれのテーマについて模造紙を用いて発表し、質疑応答で議論するというものである。

<内容>

#### ○1班

学校で急病人がでた時の応急処置について調べた。胸骨圧迫や人工呼吸、AED の使い方などについて絵や図をふんだんに用い、わかりやすくまとめた。

#### ○2班

千葉高校における避難について調べた。学校の地図や指定の避難経路をもとにいくつかの場所での問題点をまとめ、独自の考察を加えた。



○3班

自宅での防災について調べた。非常用持出袋の中身、家具、寝室などいくつかの観点について発表をした。箇条書きにするなどの模造紙を見やすくする工夫がみられた。

○4班

自宅における避難について調べた。家の図、グラフによって、発表に説得力を持たせ、とても密度の高いものに仕上がっていた。

○5班

鉄道における防災について調べた。現行の防災対策を調べるだけでなく、様々な状況を想定して自分たちの提言をしていたところが独創的であった。

○6班

学校の最寄り駅からの通学路における防災について調べた。実際に現地に行って調査し、危険箇所を地図にまとめた。対策までしっかりと練られていた。

<良かった点>

- ・絵、図、グラフなど模造紙を見やすくする工夫がみられた。
- ・インターネットや文献を写すだけでなく、実際に調査をしたり、考察を加えたりしていた。
- ・発表にユーモアがあった。
- ・クラスの人全員が熱心に発表を聞いていた。

<反省点>

- ・模造紙の内容が少し薄い。
- ・発表時間が5分を過ぎている班が多く、そのために最後の質疑応答ができなかった。
- ・当たり前のことが多い。

<おわりに>

今回の公開 LHR は私の予想以上にいい出来であった。立て続けに行事が入った中でかなり厳しい時間の中でみんな頑張っていたと思う。すべての発表が終わった後、話し合いで議

論をより深めようと思っていたが、時間がなくてできなかったことが心残りである。クラスの人の協力で本当に有意義な一時間にできた。

② 1年B組

クラステーマは「実際に地震が起きた時どう動くか」であった。

各班のテーマは次のとおり

- 1班：地域との関わり
- 2班：二次災害への対策
- 3班：情報の入手
- 4班：避難所としての学校
- 5班：交通手段
- 6班：帰宅困難・引き渡し

1班は共助というキーワードを基として地域の関わり的重要性について説いていた。地域でのかかわりが希薄になっているこの時代にこそ自治体や地域の住民との関わりが大事であると考えさせる内容であった。

2班は津波や火事への対処法について説いていた。千葉県も海に面した県である以上津波対策が重要であると考えさせられた。

3班は情報についてであった。情報があふれているこの社会において情報の取捨選択の重要性を説いていた。

4班は東日本大震災の時の千葉高校の様子を調べていた。避難所としての課題が浮き彫りになったと思う。

5班は千葉県の地図を用いながら発表を行っていた。交通網がマヒしてしまった時の対応を考えさせられた。

6班は帰宅困難者についてであった。東日本大震災での教訓を踏まえ改善点が提言されていた。

全体的にそれぞれの班がそれぞれのテーマを深く調べ各々の考えをきちんとクラスに伝

えられていたと思う。また、今回の発表を通じて様々な課題が明らかになったので行政や地域と連携しながら改善していけたら良いと思う。

＜先生からの総評＞

「地震が起きた後の行動について、それぞれの班でよくまとめられていたと思う。3/11の経験は色々な点でわれわれに教訓を与えてくれた。特に情報と交通については私自身この災害をきっかけとして知ったことが数多くある。今回のLHRをきっかけとして今一度、災害時の連絡方法や備蓄品のことなどを家族で話し合ってもらいたい。」



### ③ 1年C組

＜1班 災害時の情報収集について＞

携帯電話が使えなくなったときにどのように情報収集を行えばよいのかなどを発表した。

＜2班 帰宅困難者の引き渡しについて＞

実際に本校で震災時に行われた引き渡しについて詳しく説明し、今後の改善策などを発表した。

＜3班 災害時の対応について＞

何よりも安全が大事であるということを説き、自分の身を守る大切さについて発表した。

＜4班 自治体の広域連携について＞

自治体同士の協力についての現在の状況や問題点について発表した。

＜5班 備蓄について＞

県や自治体が行っている備蓄の状況や、家庭でどのようなものを備蓄したほうがいいのかについて発表した。

＜6班 自助・共助・公助について＞

一見堅苦しそうな言葉ですが、自作の絵を用いてわかりやすく発表した。

＜まとめ＞

どの班も自分たちのテーマについて積極的に調べ学習や意見の交換をしており、この時間はそれぞれの班の創意が反映された発表で非常に意義のあるものとなった。

特に各班とも模造紙の作成に力を入れており、グラフや時にはユーモアを交えた絵をわかりやすく配置し、皆の記憶に残ったことと思う。

この防災についてのLHRで、各々が災害・防災についてもう一度見なおし、考えを深めることができたがよかった。



### ④ 1年D組

＜授業の流れ＞

生徒を6つのグループに分けて、グループごとに異なる切り口から防災について調べ、模造紙やスケッチブックを用いて発表した。

＜内容＞

○液状化

液状化のメカニズムについて紹介した。水を含む層の地表からの深さによって液状化の起こりやすさが変わることを用いて、千葉県を液状化の危険性の高さで区分した。

### ○学校とその周辺の地震発生時における安全性

校内の火事がおこる可能性のある場所や非常階段、避難経路を確認した。

東日本大震災のデータを基に、東京湾近くの高台に位置する千葉高校に津波による被害があるかどうかを予測した。

### ○状況別の避難方法

高層ビル、デパートの地下、海など、場所別の適切な避難方法を、寸劇やクイズを用いて紹介した。

### ○帰宅困難者について

東日本大震災のデータを用いて、帰宅困難者の人数、帰宅しなかった理由などを紹介した。むやみな行動を起こさず、「良い帰宅困難者」になることを提言した。

### ○災害時の食料について

年齢別の摂取すべきカロリーを、一般的な食品やお菓子の量に換算して紹介した。

### ○高校生にできる災害時のボランティア活動

マスクとスコップがあればできる「泥かき」、力を必要とする「水運び」、気軽にできる「寄付」を紹介した。

### <まとめ>

東日本大震災を中心とする過去の地震のデータを集め、それらを効果的に用いて実用性の高い内容を発表できた。

日本は地震大国であり、災害に関するデータはたくさんあるので、私たちに必要なのはそれらを知る機会ではないだろうか。

### ⑤1年E組

3月11日の東日本大震災、私たちにとっては

衝撃的で忘れがたい。そのためにも、地震のことを知り、対策を練る必要がある。だから我々は学級で班ごとに話し合い、その知識を深めることにした。

防災に関する資料等を活用し、災害時をイメージしながら防災について考える。班をA～Fの6班に分け、それぞれ異なった議題で防災について発表する。ここでは発表順に班を記載。

A班「学校で地震が起きたら!？」

D班「電車の中で地震が起きた時」

F班「津波への対策」

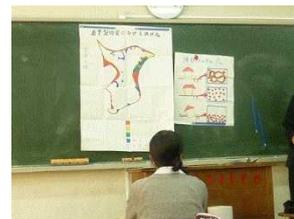
B班「地震で火事が起きたら」

E班「もしも避難所が壊れたら…」

C班「地震のために備えること」

<各班の発表の簡単なまとめ>

A班 学校には人が多くいるため、集団行動が大切である。また、小学校の頃から言われていた「おかしも」の実践をする。



いつ起こるかかわからない地震。それを想定した避難訓練は

緊迫感をもって臨もう。

D班 座っていたら、物が落ちてくることを想定し、低い姿勢になる。立っていたら、他人の迷惑にならないようつり革や棒にしっかりつかまろう。



F班 地震や火事だけでなく、津波のことも想定し、避難訓練を強化する。また、津波に

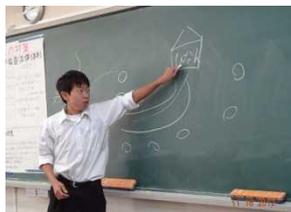
についての知識を深めることも大事である。

**B 班** 阪神淡路大震災の死者のうち、焼死は全体の 11%である。火災から身を守るためにも、消火器・火災報知器の設置、風呂の水のくみ置きなどを進めると良い。(※火災は最初の 3分で消せるらしいので早めに消そう。)

**E 班** 広い場所の中央に集まる。あるいは、避難所を前もっていくつか確認し、他の場所へ移動。避難所では、多くの人がいるので、譲り合いの精神を。

**C 班** 持ち運べる必要最低限のものを用意し、かばんに入れておく。また、それがつぶれないためにも、家具の固定も必要である。因みに「持っていて良かったもの」の 1位は懐中電灯だそうだ。

<感想> 意外と知らないことがあり、防災に対する意識が高まったものがあった。班によっては内容が薄くわかりにくいところもあったが、今回の授業で防災に関する意識は高まったと思うので、この授業を行って良かったと思う。



⑤ 1年F組

「地震発生前後の対応」を全体のテーマとし、クラスを6つの班に分け、1、2班は「地震が起こる前の準備」、3、4班は「地震が起こ

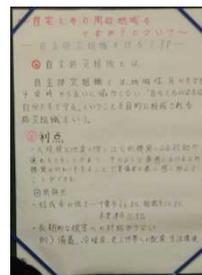
った直後の対応」、5、6班は「地震後の生活」についてそれぞれ調べた。

どの班も放課後に残るなどして、積極的に準備を進めていた。

1班は、東北大震災で意外にも必要とされたスリッパの重要性について発表した。勿論スリッパだけでは不十分だが、スリッパを備えておくことで倒壊した建物の近辺を歩くとときに足を傷つける心配を減らし、また現在防災専用のスリッパや、蓄光素材を使ったスリッパがあることなども報告していた。

2班は、災害の備えについてクイズ形式で発表した。貴重品を置く場や非常食として最も適当なものを選ぶ問題など全四問で、皆の興味を引きつけながら、調べたことを報告していた。

3班は、帰宅困難について発表していた。地震発生から帰宅困難に陥るまでのメカニズムや、その時にどうすればよいかなど、東日本大震災の時の実際の千葉高の対応を例にして、詳しくまとめ報告していた。



4班は、家に居て大地震が起きた時の対応について、途中に劇を入れながら発表した。家で待機する場合と非難する場合、それぞれの

対応の仕方をまとめ、劇では笑いを取りながら、地震の際に大切なことをうまく表現していた。

5班は、地震後の生活について、ダンス維持と停電時に観点を絞って発表していた。



断水、停電（計画停電も含む）それぞれにおいて、東北大震災の時にはどの

くらい深刻だったか、どのような対応がとられたか、またこれからどのような対応が必要かについて詳しくまとめている。

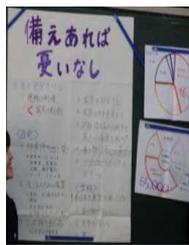
6班は、地震後の生活における困難について、液状化のあった浦安市を例に発表した。家屋の倒壊、買占め、液状化、上下水道、それぞれで起きた困難について調べたことをまとめ、それぞれについてどのような対応をすればよいか、考察したことを簡潔に報告していた。

それぞれの班が、忙しい中でも真剣に取り組んでいたため、とてもよい発表ができていたと思う。このようにみんなが協力して何かを成し遂げるといふことは、実際に災害が起こった場合に最も必要なことなので、そういった意味でもとても為になるLHRだったと思う。



⑦ 1年G組

< 1班 >



『学校・自宅地震が起こったことを想定し、備えについて』

実際に地震が起こったことを想定し、自宅・学校の場合でそれぞれ具体的な対策について、データ等を参考にまとめた。

< 2班 >



『自宅で地震が起こったことを想定し、できる備えについて』

仮想の地図を用いて避難のシミュレーションをし、避難経路を考える際の留

意点について細かく説明。

< 3班 >

『家庭での地震への備えについて』

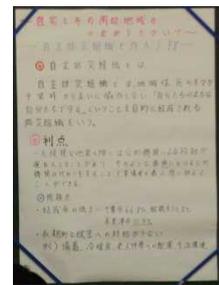


高校生の地震対策の現状を調査し、それをもとに改善すべき点を考察し、まとめた。

< 4班 >

『自宅とその周辺地域のつながりについて』

自主防災組織と呼ばれる地域と連携した防災組織について詳しく調べ、利点と問題点をまとめて考察した。



< 5班 >

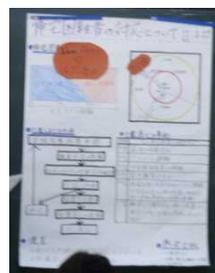
『千葉高校と周辺地域のつながりについて』



地図を用いて千葉高校周辺の避難場所についてまとめ、地域連携との問題点についても考察した。

< 6班 >

『学校で地震が起こった際の帰宅困難者引き渡しについて』



東日本大震災の際の千葉高校での帰宅困難者引き渡しの改善すべき点を指摘し、提言した。

⑧ 1年H組

< 概略 >

「地震に備えよ」をテーマとし、クラスを6班に分け、班ごとに小テーマを決め、調査し発

表する形式を採った。東日本大震災発生から日も浅く、クラス全員が大震災への危機感を感じており、真剣に取り組むことが出来た。

<各班の発表>

○5班

テーマは「自宅で物質的に日頃から対策できること」。家具に施す対策として、家具固定に使う「突っ張り棒」、窓ガラスを保護する「ガラス飛散防止シート」他には「耐震ジェル」等を紹介した。また、家屋の耐震対策として「AIR 耐震」という構造、備蓄物資の詳しい説明がされた。

○4班

テーマは「地域のつながり等意識的に日頃から対策できること」。班の調査によると、地域でのまとまった防災訓練などはあまり行われていないということだった。また災害時の拠点となる学校と地域の関わりも薄いという。従って、日頃から生徒が地域との関係を深めるべきだと主張した。

○1班

テーマは「学校が対策できること」。調査によると、千葉高校では備蓄対策がで十分でないこと、また費用的な面から対策は思うように進まないであろうことを発表した。従って、個人での備え、具体的には簡単な備蓄等も必要であると発表した。

○3班

テーマは「帰宅困難者と学校の地震への対応」。帰宅困難者は距離によって区分し、柔軟に対応すべきだと発表した。千葉高校は現在の対応では不足であると指摘し、生徒は個人が情報を得て、冷静に判断し主体的に行動すべきだとした。

○6班

テーマは「私たちが学校で被災した地域に貢献できること」。千葉高校に地域の方々

難された際の案内や配給など、予想される事柄の対策を述べ、「周りの人を思いやる心」が重要であるとした。

○2班

テーマは「千葉高校の避難場所としての有用性」。千葉高校は果たして避難場所として地域に貢献できるのかという疑問から調査をし、避難場所としての条件から千葉高校には備蓄もなく、避難場所としては不十分だとしたが、普段から何ができるか考えるべきだとした。

<総括>

東日本大震災から1年半が経ち、人々の防災意識も段々と薄れているように感じる。しかし、大地震はまた来るのである。今回、各班の発表には「自分の身は自分で守る」という趣旨の意見が多かった。自分を守ることによって全体の意識を高め、地域や仲間とのつながりを大切にする。これが成立して初めて、防災活動は成り立つのではないかと思った。



## 6 成果と今後の課題

本校では、東日本大震災の教訓として平成23年9月15日に危機管理マニュアルを見直し、さらに今年度、県から『命の大切さを考える防災教育推進事業』実施校の指定を受け、現千葉高校で出来る課題に取り組んできた。防災講演会や防災公開LHRで様々なことを学び、また地域との防災訓練での実体験は生きた学習となり、地域の行事への参加要請も頂けるようになった。

実施テーマは「災害発生時の生徒の帰宅困難・引き渡し」である。その対応として、交通網の遮断等により帰宅困難の生徒が発生した

場合、校内に留め置くことを原則として、備蓄を前提とした基本的な対応案を提示する。

話番号は保護者自宅不在時のみならず災害時の緊急連絡先とする。記載優先順位は父母、年長の兄弟姉妹（高校生以下は除く）、親戚、父母の友人等を記載する。

**(1) 災害当日**

**①校内対策本部の設置**

災害発生後直ちに校内対策本部を設置する。対策本部は大会議室および事務室とする。災害に対する情報は対策本部に集約する。

今後、地域の方々との連携が深まってきたことを契機に、学校の地域住民の避難所としての認識を深め、お互いが協力できる体制の整備や生徒の帰宅困難・引き渡しについて23年度の実体験を生かしていくことが重要と考える。

**②災害対応基本方針**

生徒の避難、宿泊場所は原則教室とし、体育館を使用する地域住民と区別する。

また、千葉中学校は昨年全生徒分の備蓄を完了し、高校においては準備検討中である。来年度より予算化して、計画的に達成していく予定である。それに伴い備蓄品の保管場所等も早急に解決すべき課題となっている。

残留生徒の把握（人数、健康状態等）及び対応

**【自力帰宅】**

保護者と連絡が取れ、帰宅を希望する場合、帰路の安全確認を条件として自力で帰宅させる。（徒歩、自転車通学者）

**【引き渡し】**

保護者と連絡が取れ、保護者または健康カードに記載がある者が迎えにきた場合に限る。

**【宿泊】**

上記の者以外は原則宿泊とする。

- ・ 宿泊した場合も保護者と連絡をとる努力を継続する。そのために普段から伝言ダイヤル等で連絡が取れる方法を確認しておくこと。
- ・ 交通機関が復旧した場合はできるだけ集団で帰宅する。（日中）
- ・ 宿泊者の情報は可能な限り学校ホームページにアップする。

**(2) 災害翌日**

自力帰宅、引き渡し、宿泊については当日と同様の対応を原則とする。

**(3) 生徒情報について**

保健室保管の健康の記録カードで残留生徒の把握を行う。そのため、記入してもらう電

